

聖書：コリント人への手紙第二 8：16～24

説教題：愛と誇りの証拠

日時：2025年1月26日（朝拝）

パウロはこの手紙の 8～9 章でエルサレムの貧しい聖徒たちを援助するための献金プロジェクトについて語っています。前回見た 10 節に、コリント教会は他に先んじてこのプロジェクトに参加する意思を表明し、それを実行し始めたことが述べられていました。その着手したことを完成に至らせよ！志をもって始めたことを最後まで成し遂げよ！と勧めました。今日の箇所はこのプロジェクトのために先にコリントへ遣わす使者たちについて述べた部分です。次回見る 9 章 5 節前半にこうあります。「そこで私は、兄弟たちに頼んで先にそちらに行ってもらい、あなたがたが以前に約束していた祝福の贈り物を、あらかじめ用意しておいてもらうことが必要だと思いました。」 その人々の推薦状に当たる部分です。

今日の箇所から分かることはパウロはこの献金の取り扱いについて細心の注意を払っているということです。お金に関することは言うまでもセンシティブなことです。何かとスキャンダラスなことが起きやすいこと、問題が起きやすい事柄です。しかも今回扱う献金は多額であったと考えられます。20 節の「この惜しみないわざ」という言葉は、他の日本語訳聖書では「豊かな寄付」と訳されています。このことについて「だれからも非難されることがないように努めて」とパウロは言います。続く 21 節にも「主の御前だけでなく、人々の前でも正しくあるように心がけているのです」とあります。

ある人は、私は主の前に正しければ人からどう思われようと気に留めないと言うかもしれません。しかしそういう態度では、せつかくの神のための働きも立ち行かなくなります。人々の間に悪い噂が流れ、そのプロジェクトは疑いの目で見られ、潰れてしまうということになりかねません。私たちが持つべき確信は神の前に正しくあることと人の前で正しくあることは矛盾・対立しないということです。パウロは人々から非難されることがないように、これが公明正大な仕方で行われることを求めました。何よりも神の栄光のために、このことに注意を払っているパウロの姿がここにありません。

その具体的な方法としてここに示されていることは何でしょうか。それはまず複数の人々を遣わしたことです。ここに3人の人のことが述べられます。その一人目はテトスです。彼はパウロが涙ながらに書いた手紙をコリント教会へ持って行った人で、その働きを終えて、今パウロがいるマケドニアに来て、その様子を報告した人です。彼はコリントで立派な働きをしました。この彼を遣わせば十分と思われたかもしれませんが。しかしパウロは一人に任せることはしませんでした。特にこのミッションはお金に関することです。パウロがそうしたのは透明性を確保するため、このことであらぬ誤解や非難が生じることを防ぐため、また万が一の誤りから守るためでもあったでしょう。今日の教会も特にお金に関すること、会計に関することは複数の人で奉仕に当たることが大切なことであると思います。

実際、ある教会で大変な事件が起きたことを私も数回見聞きしました。(詳細省略) 考えて見ればイスカリオテのユダもそうでした。12弟子の会計係さえ盗みを働いていたのです。私たちは信仰を持って、なお罪を犯しやすい人間です。ですから悪魔に機会を与えないためにも複数の人で事に当たり、互いに説明責任を果たせるようなシステムにしておくことが肝要でしょう。

また遣わされる3人を良く見ると、テトスはパウロの同労者であり、3人目の人も22節で「私たちの兄弟」と紹介され、パウロと深い関わりにあった人だと思われます。その一方、18～19節に記されている二人目の人は違うようです。彼は18節で、「一人の兄弟」と言われているだけで、19節では「諸教会の任命を受けて」と言われています。いくら複数の人を選んだとしても皆が普段からパウロの力強いリーダーシップのもとにある人だったら、透明性を確保するのは難しかったかもしれません。しかしここにはそうでない人が加えられています。彼は諸教会で称賛され、任命を受けた人です。この諸教会とはおそらくマケドニアの諸教会のことと思われます。彼はパウロの推薦によったのではなく、諸教会が選び、任命した人です。その彼はいわば第三者的な立場から監査役のような働きをしてくれる人となるでしょう。パウロは遣わす人たちをこのような構成としました。この組織の内に、だれからも非難されることがないように、主の御前だけでなく、人々の前でも正しくあるように心がけ、実践している姿を私たちは見ることができます。

さて複数の人が立てられるべきこと、また第三者的な立場の人も加えられるべきこ

とを見て来ましたが、このような組織や制度が整えられれば十分というわけではありません。それとともに、どんな人を選ぶかも重要であることが今日の箇所を示されています。遣わされた3人についてももう少し詳しく見て行きます。一人目は16～17節に記されているテトスです。彼について先にいくらかのことを述べましたが、ここに書いてあることに目をやると、パウロがコリント教会のことを思っているのと同じ熱心を持っている人と言われています。その彼にパウロは今回のプロジェクトのためにもう一度コリントへ行ってくれるようにと勧めました。それに対してテトスはこれを受け入れ、「大変な熱意をもって、自分から進んであなたがたのところに行こうとしています」とあります。今までコリントで奉仕して来た彼が、また行くの？とは言いませんでした。大変な熱意をもって、自ら進んで行こうとしているとあります。

二人目の人については18～19節に記されています。名前は書かれていません。彼は福音の働きによってすべての教会で称賛されている人、評判の良い人でした。そして先に触れたように、マケドニアの諸教会からこの恵みのわざに携わる同伴者となるようにと任命された人でした。

そして3人目の人については22節に記されています。彼の名前も記されてはいません。彼は多くのことについて熱心な人であり、パウロたちはそのことを何度も認めました。つまりともに過ごし、奉仕する中で、試され、テストされて、それは確実であると認められた人でした。彼はコリント教会の様子を聞いて深い信頼を寄せ、益々熱心になっているとあります。

ここから人数が複数であれば、誰がその奉仕にあたってもしも良いというわけではないことが分かります。特に献金という慎重な取り扱いを要する奉仕に携わる人は、それまでに十分に試され、信頼できる人であるべきであるということになります。そしてこの3人に関する推薦の言葉の中で特に目立つ言葉は何でしょうか。それは「熱心」という言葉です。これは感情的に熱い人、いつも興奮している人という意味ではありません。これは勤勉さに現れるような熱心のことです。その事柄に真剣に取り組む人、そのために献身し、努力している人のことです。良く見るとテトスに2回、また3番目の人にも2回、この言葉が使われていますが、2番目の人には使われていません。それは2番目の人はパウロと深い関係になかったことと関係するのかもしれませんが。しかしこの2番目の人は先に見た通り、マケドニアのすべての教会で称賛され、諸教

会の任命を受けた人です。ですから彼もまた先に見たような意味で熱心な人であったことは間違いないでしょう。

23 節のまとめのことばを見ると、テトスはパウロの同労者と記され、他の二人は諸教会の使者、すなわち代表者、また「キリストの栄光」と言われています。つまりキリストの栄光を現す器、キリストに栄光をもたらす器ということでしょう。そういう人たちが選ばれているということにも私たちは注目しなければなりません。

と同時に、この熱心は神が与えたものと 16 節で言われていることにも注目したいと思います。つまりここで称賛されている「熱心」は人から出て来るものではないということです。生まれながらに持つ性格のことではない。また単に情熱的な人というのでもない。これは神が与えてくださる性質です。イエス・キリストを与えてくださった神の恵みを良く知ることを通して、その人の内に生み出される性質です。神の恵みを本当に知るなら、その人は神の御心を行うことにおいて熱心な人になります。それは神の恵みのみわざです。私たちも神から、この性質をいただく者となって行かなければと思わされます。そのような人こそが神の働きのためにより良く用いられます。私たちも神の恵みにより、この 3 人の使者のような熱心を与えられ、その性質が色々な機会に試され、人々にも認められる者となることを求めたいと思います。そうして神の栄光の働きのために用いていただく者たちとされたいと願います。

私たちの信仰はそのような実を結ぶべきであるということは、コリント人たちについても当てはまります。最後に 24 節の言葉に注目します。ここに「あなたがたの愛の証拠と、あなたがたを私たちが誇りとしている理由を・・・示してほしい」とあります。「証拠」また「理由」と二つの言葉が使われていますが、原文では一つの言葉があるだけで、その一つの言葉に二つの表現が掛かる形になっています。ポイントは証拠を示してくださいということです。

まず愛の証拠です。すでにこの章 8 節でパウロは「あなたがたの愛が本物であることを」示してほしいと言いました。その前の 7 節ではパウロたちの福音宣教を通して、コリント人たちが愛を豊かに持つ者となったことが述べられていました。ですからもちろん神の愛が基礎です。神の愛を知り、神の愛に生きる者と彼らはなりました。その愛は困窮した状況にある神の民、兄弟姉妹を助けるわざにおいて示されるべきであ

るということでした。つまりこの献金を喜んで行うこと通してあなたがたの愛が本物であることを示してほしいということでした。それと同じことです。その愛の証拠を示してほしいとパウロは言います。

また「あなたがたを私たちが誇りとしている」ことについては、この後の9章2節を見ると良く分かります。そこに「私はあなたがたの熱意を知り、そのことでマケドニアの人々にあなたがたのことを誇って、アカイアでは昨年準備ができていると言ったのです」とあります。アカイアとはコリントを中心とする地方のことです。つまりパウロはマケドニア人たちに、コリント教会では昨年からの献金の準備を行っていると言ったのです。それがマケドニアの諸教会を奮い立たせました。なのにマケドニアの教会からの代表者を含めた3人がコリントに到着した時、コリント教会でこの献金プロジェクトのための準備が十分にできていなかったら、どうなるでしょうか。あのパウロの誇りは何だったのか？あれはウソだったのか？ということになりかねません。パウロはもちろん人間的な発言をしたのではなく、コリント人たちの内に神の恵みが働いている様子を見て取ってマケドニアの諸教会に彼らのことを誇り、証したのです。それが真実であることを今回の献金プロジェクトにおいて示してください！その証拠を諸教会の前に示してください！と言っているのです。それは他の神の民にとって励ましになるからです。それは神の恵みの素晴らしさを証しするものとなるからです。

今日の箇所から私たちの神への信仰は人の前でも実証されるべきことを改めて思われます。「神の前に正しければそれでいい、人にどう見られてもいい」ではないのです。それでは神の栄光につながりません。私たちは神の前に正しくあるように人の前でもそのように認められる者であるようにと心を用いて行く者でありたいと思います。また今日の箇所から、神との交わりを通して「熱心」という良き性質がさらに自らの内に培われることを祈り求める者とされたいと思います。一時的な熱心ではなく、継続する熱心として、試され、人々に認められる者になってこそ、私たちは主の大切な働きにより良く用いられる者とされます。また献げ物を献げることにおいても私たちの信仰は外に表されるべきであることを覚えたいと思います。私たちが愛に生きている証拠は私たちのお金の使い方にも現れます。そういう意味でどのように私たちが献金するかは確かに私の信仰のバロメータとなるものであり、私たちの内側にあるものを外に映し出す証拠となるものです。これらのことにおいて神からいただいて

いる信仰と愛の実質を示し、そのように私たちを導いてくださっている神の恵みを証しし、神の栄光のみわざのために用いられる者たちへと導かれて行きたいと思います。